

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



御縁あって、ノーベル生理・医学賞(2015年)を受賞された北里大学特別荣誉教授の大村智生と先頃お会いしました。コロナウイルスについて、見識あるお話を伺った後、『ストックホルムへの廻り道』というご著書を頂きました。本書を読んで知ったのですが、大村先生は医療だけでなく芸術分野でも貢献、女子美術大学の理事長までされています。さらに、「女性画家の作品を集めた美術館を作ろう」と思い立ち、山梨の美家の隣地に私設で「華崎大村美術館」を2007年に開館。

その女子美の卒業生であり、大村教授と深い縁のあった女流洋画家の先駆者・入江一子さんが8月10日、老衰のために都内の病院で死去されました。105歳の大往生です。

僕が入江さんを知ったのは、4年ほど前に見たテレビ番組でし

220 画家 入江一子



た。100歳の女性で、身長より遥かに大きい百号や二百号のキャンバスに絵を描いているお姿に見入ってしまいました。
小学校1年生の時から絵を始めたと入江さんが、晩年描き続けたのは、シルクロードの風景でした。

101歳で描いたという大作

「回想・四姑娘山(スークーニャンシャン)の青いケシ」は、76歳のとき、チベット高原に咲く幻の青い花を求め標高4300mの岩山まで20時間も馬に揺られた思い出を絵にしたといえます。その体力と記憶力に脱帽です。最後の旅行はモンゴルで、84歳だったそう。

105歳大往生、晩年まで創作

その後、100歳を過ぎてもずっと絵を描き続けていた入江さんはヘルパーさんを入れながら、一人暮らしを続けていました。ライフスタイルも驚くべきもので、1時間絵を描いては1時間寝るという生活を長年続けておられたのだとか。

「夜も昼もないです。描きたくなったら描いて、疲れたら休む。せいりたくな生活です。」
その後、100歳を過ぎてもずっと絵を描き続けていた入江さんはヘルパーさんを入れながら、一人暮らしを続けていました。ライフスタイルも驚くべきもので、1時間絵を描いては1時間寝るという生活を長年続けておられたのだとか。

ね。床に就くと、2分で眠りにつけます」とインタビューで答えています。
よく、「医者から見ても、理想の睡眠時間は何時間でしょう?」とか、「長生きするための睡眠方法は?」といった質問を受けます。睡眠に関する医学論文は山ほどありますが結局のところ、「好きなときに寝て起きて、好きなときに食べる」が正解ではないでしょうか。不眠症状を訴える患者さんはたくさんいますが、不眠で死んだ人を見たことがありません。眠れないのなら、読書でも映画でも、好きに過ごせばいい。身体も脳も疲れたら、必ず眠れるものです。好奇心を失わず、好きな事に一生懸命。大村先生も入江さんも、その生き方が、アートです。

好きなときに描いて寝る

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医科大学卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。